

●二人で味わう古典和歌(37)

さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空に波ぞ立ちける

紀貫之

『古今和歌集』「春歌下」の一首。

まずは、大岡信のすばらしい鑑賞を紹介したい。

「なごり」は「名残り」であると同時に「余波^{なごり}」である。この、もともとは語源を共有し、影像としても互いに惹き合うところをもっている二つの語が、一つに融け合って一首のかなめの位置に置かれる。一首全体は、この微動する一語の周囲にゆらめいて、何度読みかえしても、かっちりした「像」が眼底に結ばれるという感じはない。風に散り遅れた桜花の幾ひらかが、水なき空の波の引きぎわにちらちらとさまよっている、その影像さえ、ともすればふと見えなくなつて、あとにはゆらめいている心の昂ぶりの、その痕跡だけが、名残りの余韻を引いていつまでも棚引いているという感じである。

(『紀貫之』)

じつさいにあるのは何か。花か、風か、水か、空か、波か。それとも「心の昂ぶりの、その痕跡だけ」なのか。ここにはすでに、ほぼ三百年後に藤原定家の提唱した(幽玄体)への兆しが匂う。(幽玄体)の中心に置かれたのは余情、すなわち「名残りの余韻」であった。

具体的には「水なき空」に注目する。空に水がないのはあたりまえというので、たとえば「果てなき空」と変えてみたらどうだろう。「さくら花ちりぬる風のなごりには果てなき空に波ぞ立ちける」。冷えびえとした水の質感をもつ波の、不思議な余韻はたちまち消えてしまう。

『古今集』は、醍醐天皇の下令による初の勅撰和歌集であるが、じつは醍醐天皇の父である宇多天皇こそ、大の和歌好き。「寛平御時^{かんぴょうのむかしのとき}后宮歌合^{のみやうたあわせ}」や「是貞親王家歌合^{これさだのちかこのいあうたあわせ}」など、『古今集』の基となる歌合を催した。

貫之の歌は、宇多天皇が上皇となり開催した「亭子院^{ていじのいん}歌合^{うたあわせ}」から生まれた、『古今集』のなかでもっとも新しい作品の一つである。そして「散る桜」大歌群の掉尾を飾る一首なのである。

(小島ゆかり)

